
神節 [夜宵] -YAYOI-

アスタリスク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神節 「夜宵」 - YAYOI -

【Zコード】

N4379D

【作者名】 アスターisk

【あらすじ】

夜と宵が交わる刻、夜宵の時間を過ごす一人のお話です。

宵が、夜になる時間。

それが今日私に許された最後の時間なのに、干渉してくる人間がいた。

「こんな所で、何してるの？」

その人は私が見えている様だった。
不思議だ、私の姿が見えているなんて。中々人間にそんな人はいないのに。

私は一応、「こんばんは」と挨拶をしておいた。

× × ×

生意気に烟月が俺を見下す夏の夜。

今夜もまた、不思議と夜の街の姿が見たくなつて、俺は人気の無い裏路地をただ悪戯に散歩していた。

夏の夜はなんだか気持ちがいい。

月は皓然と霞み、空は世界の影となる。

その雰囲気が俺を落ち着かせる。

辺りの気配を楽しみながら歩いていると、いつの間にか裏路地を抜けていた。

田の前に表れた小さな公園。アスレチックなどが設置してある小さな広場とでも言おうか、そんな程度の公園だ。

ただの公園の他何の変哲もないが、ただの公園も、ちょっとしたことでただの公園では無くなってしまつ。

そう、例えば女の子が一人で居るとか。

たつたそれだけで空気が一変、雰囲気は変わつてしまつものだ。女の子がただ一人寂しそうに座つているブランコの方へ、俺は向かつた。

「こんな所で、何してるの？」

会話出来るはずが無いのに、俺は人間に話しかけてしまつ。無意識的に、何かを期待しているのだろう。

女の子は俺の心境に反してこちらを振り向き、少し目を見開いた。

「こんばんは」

これは、驚いた。

こちらから話しかけておいて何だけど、不思議だ。俺の姿が見えている、声も聞こえているのか。中々こんな人間はいない。

俺は一応、「うん、こんばんは」と挨拶しておいた。

× × ×

私はその人に「うん、じんばんは」と挨拶され返すと、先ほどの質問を思い出した。

「何をしているか、と私に訊きましたよね」「うん、まあ」

とても不思議そうな顔をしている。いかにもここで何をしていたんだ、とでも言いたげな感じ。その人は私の座っているブランコの隣のブランコに、腰を落ち着かせた。

優しそうな人間だけど、私の事を見ている時点では普通の人じゃない。それでも、会話する価値ぐらいはあるよね。だから、会話してみよう。

「月を見ていたの」「月…？」

今宵は霞んだ烟月だ。確かに綺麗だけど、どこか悲しげで、切なくなつてくるような月。私はそんな月に今宵も憧れていた。

「貴方は?何でこんな公園に?」

その人は、月を仰ぎながら答える。

「夜の散歩が好きでね、今夜はなんとなべりつひの道に出ちやつて

今夜？夜？

「そう。私は、いつの時間はここに居るよ

その人はブランコを少し漕ぎだすと、私の方を向いて「なんで？」
と一言、聞いた。

私はその愚問に答える。

「宵の刻が好きだから、かな」

その人は笑つた。

「奇遇だね、俺も夜の刻が好きだから散歩してるんだよ？」

夜が、好き？

変な人間、好きだからって別にわざわざ散歩しなくても良いのに。
それに、まだ夜じやない。

× × ×

その女の子は月が好きだから、宵のこの時間はこの公園に居ると
言った。

宵が好きつて。

宵、か。

変な人間の子だ、別に好きだからってこんな公園に用を見に来な
くてもいいと思つけどな。

それに、もう宵は過ぎたはず。

俺はブランコを漕ぎながら、女子子に「なんで夜じゃなくて、宵
が好きなの？」と聞いた。失礼かもしれないが、反応を見たかった。

女子子は小さな声で、微笑む。

「好きだからよ、好きなのに理由がいる？」

要らない。

確かにそうだ、俺だって夜が好きな事に理由を聞かれたら答えよう
がない。

「じゃあ逆に、貴方はなんで宵じゃなくて夜が好きなの？」

聞かれてしまった。

やはり失礼なことを聞いたらしい。野暮だな。

「なんとなく、かな？」

俺の答えに、女子子は不意に笑つた。

「ふふ、人のこと言えないじゃない」

× × ×

宵が好きなのに理由なんて要らない。

少し意地悪かな、私はその人にも聞いてみた。

「じゃあ逆に、貴方はなんで宵じやなくて夜が好きなの？」

この人の反応を見たかったのもあるけど。どんな答えを持つているのか、私は凄く気になった。

「なんとなく、かな？」

なんとなく、って。

なんか少し笑えてしまう。

「ふふ、人のこと言えないじゃない」

この人間は何なのだろう？本当に不思議な人間だ。面倒な好奇心。私はこの人が知りたくなってしまった。

そうだ、名前。この人の名前はなんだろう。

私がこの人に名前を聞こうと、口を開けようとした瞬間。

「君、名前は？」

逆に訊かれてしまった。

突然の質問に困ってしまう。

私はこの人の名前を訊いてここから去るのと戻っていたのだけど、これでは私が名前を教えなくちゃいけない。

どうしよう。

× × ×

女の子は唇を強く結んで考えていた。
俺に名前を教えるのか教えないのか。

この子の名前を聞いたらこの公園から去ろう。

俺はそう思っていた。が、女の子は自分から教えてはくれなかつた。

「私が教えるよりも先に、貴方の名前を教えてくれない？」

女の子は笑顔でこちらを見ながら、そう言った。

「…」

俺が先に名前を教える…。

この子は俺の姿が見えている。だから普通の人間の子で無いことは確かだが、それでも俺の様な存在が他人に名前を教えるだなんて自殺行為だ。

それこそ神に消されかねない。

× × ×

この人は私の様な存在が見える人間。
名前を教えるだなんて自殺行為は出来ない。神の意に背くことは

自らの存在を消滅させることだから。

私は、無言のままのその人に言った。

「何か、教えてくれない理由でも？」

試さなくちゃいけない、この人を。

もし私の姿が見えるだけで、本当はただの人間だったら。

人間に真理を導くことになってしまつ。

× × ×

人間に真理を教えることは神の意に背くこと。則ち、俺の存在は消されることになる。

『夜』の真理を、人間に教えるわけにはいけない。

× × ×

神は、この世界の規定を『精』という形にした。

私の名前は真理と同じこと、神は人間に真理の知識を与えた。

神の意に背くことは許されない。

『宵』の真理を、人間に教えるわけにはいけない。

× × ×

俺は言った。

この女の子を試すために。

「いや、そんな理由は無いけどね。でも一ついい？」

女の子は興味を持ったみたいに、俺を見る。

「ん？ 何？」

「君は、『人間』か？『精』か？どっちだ」

仮に精同士ならば神の意に反することは無い。この言葉を理解しなければ、この子は人間だ。

女の子は、俺の顔をさも驚いた顔で見つめた。

「精？ 何のこと？」

人間、なのか？

× × ×

まさか、この人は精なのだろうか。

ううん、精だ。でないとあんなこと普通の人間に言うことはでき

ない。

しかも私に名前を訊かれて、私に名前を教えてもいいか、つまり私が人間ではないかを試してゐる。

私は口を開いた。

「貴方は、その精なの?」

その人は目をぱちくつさせて、やがてため息をついた。

「ああ、そうだよ」

× × ×

「この子、俺のことを精だと確信している。」

でないと精と言つ単語に、まずは疑問を持つはずだ。

俺は、名前までは言わないので、存在自体は言つてみた。

× × ×

「俺は、『夜の精』だ」

夜の精。

でもこの時間は宵の刻。私だけの時間のはずなのに。
なんで…? ？」

× × ×

女の子は無言のまま。何も言葉を出さず、立つて向ってしまった。

「今は、私の時間よ…? なんで…」

「この子は今、自分が精だと認めた。ならば、この子は…」

「君は、宵が好きだと言ったね?」

「そうよ? 察しの通り、私は『宵の精』」

やつぱり。

× × ×

私は不思議に思つた。

「私は宵の精、貴方は夜の精。今はもうすぐ宵が夜に成る時間、つまりまだ私の時間のはずよ。なんで貴方がこの時間に存在しているの?」

夜の精は含み笑いをした。性格が悪そうな笑い方だ。

「確かに、今は宵が夜に成る時間だ。でもそれと共に宵から夜に成る時間とも言える、違うか?」

宵が夜に、宵から夜に。

そんなの、とらえかた次第よ。

「そうね……」

「つまり、今のこの短い時間は俺と君の時間と言つわけだ」

でも、

「でも、もうすぐ貴方だけの時間に成るわ」

「そうだな、だがそれも神の意だ。仕方がない」

私は、わけもわからない不安に襲われた。

「…」

なんだか悔しい。

今まで私だけの時間だったのに、まさか宵と夜が重なる時間があつたなんて。

「でも宵と夜が出会うなんてこと、あるんだな

夜の精は私とは裏腹に、軽い口調で話しおした。

「うふ？」

きつと、今からは夜の時間に成るからだ。宵が終わるからだ。

「宵と夜もそうだけど、暁と朝だつてそうだ。精と精が出会うなんてこと考えたことなかった」

そうか。

精と精が出会い、それは実は凄いことだ。

今まで平行線だった物同士が突然この一定の時間だけ交わったのだから、しかもこの公園と言つ一つの場所で。

「ねえ、夜」

夜の精は欠伸をして、私の方を横目で見る。

「ん？」

「また、暇潰してくれる？月に憧れるのは休憩しようかなと思つて」

夜の精はまた、ため息をした。

「またここに来いつて？」

私の意識が、段々無くなつて行く。

「うん、私はもうすぐこの世界に干渉できなくなっちゃうから。最後にこれくらいは約束しようと思つて」

⋮。

夜の精は少しの沈黙の後、約束をしてくれた。

「じゃあ、またここで会おうか

「ええ。この夜宵の刻に、また会こましょつ」

× × ×

夜宵の刻。
夜宵 ごとう

なるほど、そつもの時間のことか。

俺はブランコを降りて、先ほどまで宵の精が座っていた方のブランコを眺めた。

彼女は宵の時間をこの公園でいつも過ごしているらしいが、俺は夜を街の散歩で過ごしていた。

同じ精でも、結構限られた時間ですることはず違つんだな。

「夜宵、か」

俺は夜の散歩を再会させるため、小さな公園を出た。

また明日の夜宵を、楽しみにしながら。

end

(後書き)

何か思う事等がありましたら、私がこれから精進するための糧として
たいので、教えて下さるとありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4379d/>

神節 [夜宵] -YAYOI-

2010年12月14日20時21分発行